

宮城県涌谷町黄金山産金遺跡の「天平」宝珠瓦

株式会社三協技術 佐々木竜郎 (士-168)

1. はじめに

743(天平15)年、聖武天皇は鎮護国家を具現化するため国分寺建立の詔に引き続き蘆舎那大仏建立の詔を發布した。国家的規模で進められた大仏の铸造の完成が迫る中、問題は大仏の鍍金・金箔に使用する金が国内で確保できていないことであった。そんな折、749(天平21)年に陸奥国守百済王敬福(くだらのこにきしきょうふく)は、小田郡(宮城県涌谷町周辺)から黄金が産出したことを報告し、900両(約13kg)を献上した。聖武天皇は大いに慶び「天平感寶」と改元、大赦や税の免除、叙勲等を行っている。そして752(天平勝寶4)年には無事、大仏の開眼供養会が行われた。

黄金山産金遺跡は、上記の産金の記事に関連するものとして1967(昭和42)年に国指定史跡として登録され、2019(令和元)年には、日本遺産「みちのくGOLD浪漫－黄金の国ジパング、産金はじまりの地をたどる－」の構成文化財の一つに認定されている。ここでは、黄金山産金遺跡および主な遺物の紹介を行い、天平銘の宝珠瓦についての新知見について触れたい。

2. 黄金山産金遺跡の概要

黄金山産金遺跡は、宮城県遠田郡涌谷町涌谷字黄金山、黄金宮前、猿手山地内に位置する黄金山神社とその境内および周辺に広がる遺跡である。

①黄金山神社について

黄金山神社は、10世紀にまとめられた延喜式神名帳に小田郡唯一の官社(式内社)として記載が見られる。これ以前に産金関連の記事に黄金山神社の名前は見られず、749(天平勝寶元)年閏5月の黄金産出に貢献があった叙位恩賞で「出金山神主小田郡日下部深淵云々」とあるが、この神主が関わる神社が格上げされたものと推測される。

しかし中世以降、神社は廃れ江戸時代には礎石のみが残された状態であったが、伊勢国白子の国学者である沖安海(おきやすみ)が1813(文化10)年に「陸奥国小田郡黄金山神社考」を記し、天平の黄金伝承に関わる神社を、この礎石の残る遺構であると考え、自ら寄進して黄金山神社を再建した。

この黄金山神社境内では、布目瓦の存在が知られており、1889(明治22)年に『天平』の文字がヘラ書された丸瓦片(写真3)が採集された。その後、1944(昭和19)年には大雨で出水のあった際、黄金山神社の下を流れる宮前川(通称:黄金沢)から、『天口(「平」と考えられる)』の文字がヘラ書された六角錐状の瓦片(写真2・4)が発見された。玉川大学教授であった内藤政恒氏は、宝形造か円堂の屋上頂部に置かれた宝珠の残片と推定し(写真5)、更に軒丸瓦の蓮華文が六弁であることと、宝珠の六角錐の形状を関連付けて六角円堂の存在を想定した。これらを受け1957(昭和32)年には、東北大学教授の伊東信雄氏により神社境内の本格的な発掘調査が行われた。

②発掘調査の成果

現神社と裏手の玉垣付近に調査区が設定され、南北約10m、東西6.5mの基壇の版築跡および礎石を設置した痕跡の根石4箇所が確認された。しかし基壇上面は既に削平され礎石も残っておらず建物構造の確定には至らなかつたが、現神社の拝殿の礎石に、その規模に似つかわしくない大きな礎石が用いられていることから、本来根石の上にあった当時の礎石が転用されたものと考えられた。根石群は約3.3m間隔で配置され、地形を考慮すると建造された建物は長さ最大20m程と推定される。

拝殿の東側に広がる崖の裾からは、多賀城II期もしくは陸奥国分寺創建期に比定される写真1の六葉重弁蓮華文軒丸瓦(※多賀城出土の瓦は八葉で異なる)と偏行唐草文

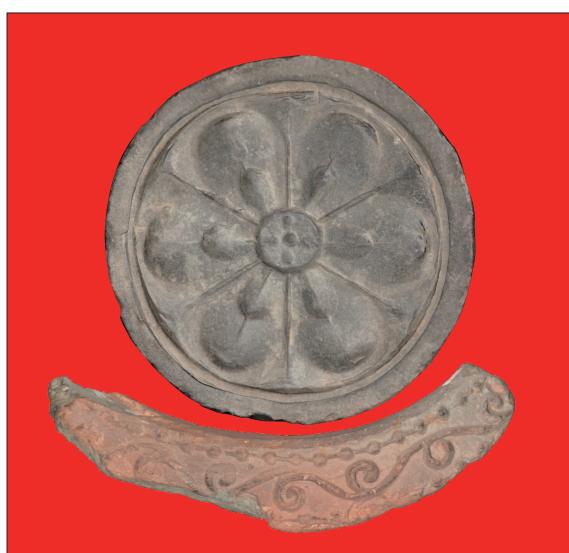


写真1 六葉重弁蓮華文軒丸瓦(写真上)・偏行唐草文軒平瓦(写真下)
(涌谷町教育委員会蔵) ※宮城県指定文化財



写真2 「天平」宝珠瓦片
(涌谷町教育委員会蔵) ※宮城県指定文化財

軒平瓦等が出土しており、8世紀中頃の瓦葺建造物の存在が判明した。この他、土師器の高壺や須恵器の長頸壺等も出土している。このような成果により、黄金山神社が奈良時代までさかのぼる寺社であることが考古学的にも裏付けられた。

3. 「天平」宝珠瓦について

「天平」のヘラ書を有する黄金山産金遺跡を代表する遺物の一つである。胎土や成型等から瓦製であることは明らかだが、それまで発見された丸瓦や平瓦類とは異なる一風変わった特徴をもつ。その形状は、外面の一部が尖り、これを頂点に6本の稜線が放射状に走って六角錐を呈する。製作技法は、外面に縄タタキの痕跡が見られ、ケズリやナデによって平瓦等と同様に仕上げられているのに対し、内面は成型時の輪積みの痕跡を残したままで、人の目に触れないからか最低限の調整にとどめているようにも見える。その形状から内藤氏は宝珠を推定しているが、現在まで奈良時代の宝珠瓦は知られておらず、また、伊藤氏の発掘調査でも六角堂が想定されるような遺構は確認されておらず、その存否は不明である。

ここでは、この宝珠瓦が面取りされた6面中、3面に刻まれたヘラ書について注目したい(写真6)。

①は「天」の下を欠いているが、これまで既に何度も触れてきたように、写真3のヘラ書と類似することから「天平」と推測される。産金を記念して仏堂が建てられた際のものとすれば、天平21(749)年から、「天平感宝(749)」、「天平勝宝(749～757)」、「天平宝字(757～765)」、「天平神護(765～767)」の18年間のいずれかの数字または元号が入る可能性がある。



写真3 「天平」丸瓦片
(個人蔵) ※宮城県指定文化財



写真4 「天平」宝珠瓦
(涌谷町教育委員会蔵) ※宮城県指定文化財

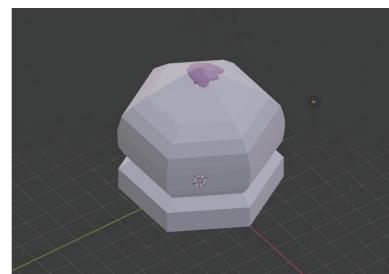


写真5 「天平」宝珠瓦復元CG



参考資料「天平」



瓦製宝珠瓦書「天口」

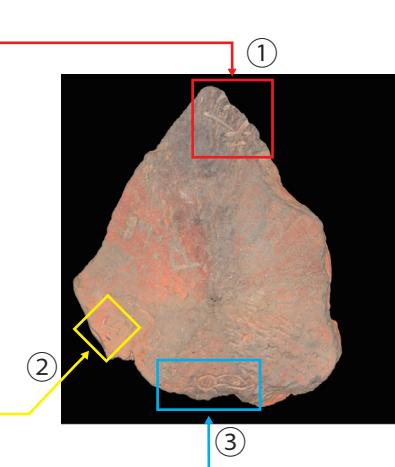


写真6 「天平」宝珠瓦
(涌谷町教育委員会蔵) ※宮城県指定文化財



参考資料：金銅幡透 (正倉院)



左側は箆で削れているが、左右対称であった可能性がある。

次に他の2箇所のヘラ書は、この「天平」銘に隠れて、これまであまり注目されてこなかった部分である。

②は草書体の「出」と考えられ、ヘラの入りや全体のバランスが酷似している。草書体の場合、楷書体の時は一画目と二画目の入りが逆になり、二画目の縦線が草書体で細くなっているように、ヘラの入りも浅くなっている(※一画目と二画目の交点の細部を観察したが、新旧関係にともなって生成される粘土のかえり(いわゆるバリ)が明瞭ではなく、筆の運びから二画目を縦線と判断した)。また、ヘラ書する際に筆の進む方向に筆の軸を倒して書いていく俯仰法(ふぎょうほう)が取られている可能性を指摘しておきたい。「出」は、『続日本紀』天平感宝元年四月二十二日条に「出金山神主日下部深淵」の記事があり、『出金山』との関連が考えられる。

③は、文字ではなく絵のようなものが想定され、円を中心にして左右対称となる図を想定した場合、宝相華文等の花弁を表現した構図となる可能性がある。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、涌谷町教育委員会には多大なるご協力をいただきました。また、「出」の解読および筆の運び等については、書家 佐々木祐一氏のご教示を得ました。記して感謝を申し上げます。

参考文献

宮城県涌谷町 1994『史跡 黄金山産金遺跡 関係資料集』

株式会社三協技術 2012『広報誌 温故知新 東北』第5号